

中国インディペンデント・ドキュメンタリーの上映と討論 顧桃（グー・タオ）監督を迎えて

タブーなき創作活動で世界の注目を集める中国インディペンデント映画。現在、中国国内での制作・上映環境は厳しさを増す一方ですが、少なからぬ監督たちが、なおも意欲的な作品を創り続け、新たな上映機会を開拓しようとしています。

顧桃（グー・タオ）監督は中国インディペンデント映画の優れた監督であるだけでなく、「栗憲庭映画学校」での教育活動や、「内モンゴル青年映画祭」の創設など、インディペンデント映画のプラットフォーム形成と発展に大いに寄与した人物として知られています。このたび、顧桃監督をお招きし、また中国インディペンデント映画を見つめ続けてきた、多分野にわたる研究者たちをコメンテーターとして迎え、上映会とディスカッションを行います。中国インディペンデント映画の過去・現在・未来を見つめる稀有な機会となることでしょう。（入場無料・予約不要）

日時：2017年4月22日（土）

15:00-16:45 『最後のハンダハン』上映

17:00-18:00 ディスカッション

18:00-18:30 Q&A

会場：立教大学（池袋）M301（マキム15号館）

パネリスト：顧桃（グー・タオ / Gu Tao）

司会：秋山珠子（立教大学ランゲージセンター）

コメンテーター：土屋昌明（専修大学経済学部）、中嶋聖雄（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科）、馬然（名古屋大学大学院文学研究科）

主催：専修大学土屋昌明研究室、早稲田大学「現代中国インディペンデント映画研究部会」、科学研究費挑戦的萌芽研究「カルチュラル・アサイラムー中国インディペンデント・ドキュメンタリーの生成と流通ー」（研究代表者：秋山珠子、課題番号：15K12846）

共催：早稲田大学アジア太平洋研究センター

協力：時代映像研究会、山形国際ドキュメンタリー映画祭



犴达罕 映像
MOOSE
FILM COMPANY

（2007）、『雨果（ユイグォ）の休暇』（2011）と、エヴェンキの人々を撮り続けてきた顧桃監督3部作の最終章。



【上映作品】『最後のハンダハン（犴達罕 / The Last Moose Aoluguya）』（監督：顧桃/2013年/100分/字幕 JP+EN+CH）満州語で「ハンダハン」と呼ばれるヘラジカは、中国・東北地方、大興安嶺（ダーシアンリン）山脈最大の鹿で、力強く威厳があるが、次第に生息地がなくなりつつある。当地に住むエヴェンキ族は低地への定住を余儀なくされ、ハンダハンとあだ名される維如（ウェイジャ）も狩りが思うようにできず、消えゆくエヴェンキ文化を語りながら、飲んでもくれるしかない。ガールフレンドと一緒に喧騒の海南島への移住を試みるが、結局酒がやめられずに帰ってくる。『オルグヤ、オルグヤ…』

【顧桃（グー・タオ）監督プロフィール】1970年、内モンゴル自治区出身。内モンゴル芸術学院で油絵を、その後、北京美術学院で写真を学ぶ。2005年からドキュメンタリー映画の製作を始め、『オルグヤ、オルグヤ…』を2007年に完成させる。『雨果（ユイグォ）の休暇』で山形国際ドキュメンタリー映画祭2011 小川紳介賞受賞。長期にわたり現代中国における北方少数民族の生活と変化に注目している。また、2014年にフフホトを拠点に自主上映組織「犴達罕（ハンダハン）映像」を立ち上げ、2016年には「内モンゴル青年映画祭」を開催した。